

Invited paper

The Future of International Higher Education Aiming for SDGs: Collaboration with Japanese Studies Students around the World

Abstract

We have been facing the COVID-19 pandemic and at the same time the larger crisis of exceeding “Planetary boundaries” as well. To solve these complex, serious, global problems, international cooperation is indispensable. Education provides a basis for international cooperation and it is through education that we can develop scientific viewpoints and knowledge, our consciousness as a global citizen, and Global Competence. Global Competence is defined in, and added to the evaluation metrics of, the Programme for International Student Assessment (PISA 2018) of the OECD. The development and improvement of Global Competence are also desired in higher education in a wide variety of fields. In this paper, from the above understanding, an overview and consideration of Online International Exchange Education are provided. The online method has prevailed during the COVID-19 pandemic instead of in-person International Exchange Education, traditionally useful for the development of Global Competence in international education. Furthermore, Collaborative Online International Learning (COIL) between Japanese major students at Burapha University and students at Kagoshima University is presented. It is reported that both groups were well able to gain the benefits of international exchange education even through online interaction. From this example, it became clear that both groups are mutually valuable as a

collaborative learning partner because overseas students majoring in Japanese studies have strong interest in Japan and their interest is also significant for Japanese students. Therefore, it is pointed out that it will be meaningful that Japanese universities utilize this special relationship with overseas students majoring in Japanese studies positively, and construct the multilateral human network to provide transnational co-learning opportunities for students. This network will contribute to the international education networks in other fields by spreading laterally and fits with the interdisciplinary orientation to solve global problems. Consequently, it is stated that the conscious positive effective development in education of these large human networks possible online will define the significance and possibilities of university international education, and will contribute to the attainment of Sustainable Development Goals.

Key words

Sustainable Development Goals (SDGs), Collaborative Online International Learning (COIL), overseas students majoring in Japanese studies, international education/human network

大学における国際教育のこれから—持続可能な開発を目指して— —日本語・日本学専攻学生と学ぶネットワークを世界に

Abstract

現在、我々はコロナ禍と同時に、「地球の限界」を超えるというさらに大きな危機に直面している。これらの複雑で深刻な地球規模の課題の解決には、国際協調が欠かせない。それを生み出す基盤は「教育」であり、教育によって、科学的な視点と知識、将来世代までも視野に入れた「地球市民」Global Citizenとしての意識、およびグローバルコンピテンスを養うことが不可欠であろう。OECDのPISA (Programme for International Student Assessment, 2018)が定義して評価指標に加えたGlobal Competenceは、高等教育でも、幅広い分野の国際教育によってその育成と向上が望まれる。本稿では、上述の認識から、国際教育の中で当該コンピテンス育成に有効な国際交流教育、その中で特に、コロナ禍で台頭したオンライン国際交流教育について概観・考察した。また、その具体的な取組みとしてブーラパー大学日本語専攻学生と鹿児島大学生とのオンライン国際協働学習 (Collaborative Online International Learning : COIL) を紹介し、オンラインでも双方の学生が国際交流教育の成果を十分得たことを報告した。この事例から、海外の日本語・日本学専攻学生は、学習対象である日本に関心が高く、それは日本人学生にも意義深く、協働学習のパートナーとして互いに貴重であることがわかった。そこで、この特別な関係性を日本の大学は積極的に活用し、今後2国間から多国間へと世界に人的ネットワークを拡げ、ともに学ぶ大きな学習機会を創ることが意義深いと指摘した。このネットワークは、他分野の国際教育のネットワークにも波及的に貢献し、他分野への横展開は、地球的課題解決の学際的な方向性にも合致する。今後、オンラインを介して可能となる、このような多人数の人的ネットワークの教育への意識的、積極的な有効展開が、大学における国際教育のこれからの可能性と意義であり、SDGs達成に貢献すると述べた。

Key words

持続可能な開発目標 (SDGs), オンライン国際協働学習 (COIL), 海外の日本語・日本学専攻学生, 国際教育・人的ネットワーク

1. はじめに

現在、世界中の人々がコロナ禍に翻弄されているが、我々は同時に「地球の限界」を超えるというさらに大きな危機に直面している。「地球の限界」は、2009年にロックストローム博士らが科学的データに基づいて唱えた「人類が安全に活動できる、安定した地球であるための9つの限界値」であり、持続可能な開発（以下、SDGsという）の基礎となっている。気候変動や生物多様性の損失などが含まれ、すでに2つは限界値を超えたと考えられている (Rockström, et al. 2009)。

これらの複雑で深刻な地球規模の課題の解決には、国際協調が欠かせない。それを生み出す基盤は「教育」であり、教育によって、科学的な視点と知識、将来世代までも視野に入れた¹「地球市民」Global Citizenとしての意識、およびグローバルコンピテンスを養うことが不可欠であろう。OECDのPISA (Programme for International Student Assessment, 2018)は、2018年にGlobal Competenceを定義して²評価指標に加えている。高等教育においても、幅広い分野での国際教育³によって当該コンピテンスの育成と向上が望まれる。本稿では、上述の認識から、国際教育の中で当該コンピテンス育成に有効な国際交流教育⁴、特に、コロナ禍で台頭したオンライン国際交流教育⁵について概観・考察する。また、具体的な取組みとしてブーラパー大学日本語専攻学生と鹿児島大学生とのオンライン国際協働学習 (Collaborative Online International Learning : 以下、COILという) に触れ、特に日本国外で学ぶ日本語・日本学専攻大学生と、日本国内の大学生のオンライン国際交流教育の今後の可能性、およびSDGsに貢献する意義について述べる。

2. オンライン国際交流教育

2020年年初から続くコロナ禍によって、実渡航による国際交流教育は停止を余儀なくされた。その中で、コロナ禍でも国際的な繋がりや出会いを絶えさせないという、国を超えた担当教員の共通の思いによって「オンラインへの代替」が一気に拡大した。まず、代替の様相を図1⁶に示す。留学等の派遣停止は多くの国でVirtual Exchange (仮想留学) の新規開発を生んだ他、留学延期によって自発的に海外の大規模公開オンライン講座⁷(以下、MOOCsという)を受講する学生も見られる。また、留学生の受入停止は、対面による国際共修授業も困難にしたため、海外教員と協働して互いの授業を結ぶCOILや、有志の海外外国人学生をオンライン授業に参加させて共修する方法も見られる。このうちCOILは、対面交流授業の代替のみならず、留学等海外派遣の代替としても実施されている。

¹ 一例として Future Design (西條、2015、2018、2021と参考文献5) を挙げる。持続可能な世界に向けて将来世代との格差を意識し、描いた将来像の視点から現在必要な対策をデザインする方法。

² PISAの定義「グローバルコンピテンスは、地域や地球全体、異文化間で生じる課題を調べ検討し、他者のものの見方や世界観を理解して尊重し、異なる文化に属する人々と開かれた適切で効果的な交流を行い、持続可能な開発と全世界の人々の心身の健康保持に向けて行動することができる能力」(筆者訳)

³ 本稿では「異文化間学生交流の有無に関わらず、広くグローバルコンピテンスを養う教育」と定義する。いわゆる国際学を始めとし、それ以外でも人文・社会・自然科学分野全てにわたって国際的な視点によって当該コンピテンス育成に寄与する教育。

⁴ 本稿では「異なる文化の学生が、自らの所属する教育機関や海外の教育機関等を通じて、双方向に交流して学ぶ教育」と定義する。

⁵ 異なる文化の学生が、自らの所属する教育機関や海外の教育機関等を通じて、オンラインを用いて双方向に交流して学ぶ教育 (畠田谷、2022)

⁶ 図1の「派遣」「受入」は、タイ王国等日本国外の大学を起点とすれば「Virtual Exchange (仮想留学)」の「海外大学」は日本国内の大学になる。

⁷ 日本においても、海外大学も参加可能で、日本の高等教育機関が多数参加する海外向け国際的オンライン教育プラットフォームJapan Virtual Campusが2022年初旬にパイロット事業を開始した。https://www.jv-campus.org/



図1 実渡航による国際交流教育のオンラインへの代替

次に、オンライン国際交流教育の形について概観する（図2）。一般のオンラインによる授業同様、同期型（リアルタイム）、非同期型（オンデマンド）があり、それぞれに双方向、一方向がある。国際交流教育⁸は、学生と教員の双方向性はもちろんのこと学生同士の「双方向交流」「協働」がグローバルコンピテンス育成に有効な鍵であるため、オンラインでも同期型、非同期型問わずそれらが重視されていると考えられる。非同期型双方向は、時差が大きい場合や、協働の際の言語的障壁を減じるため対応に時間をかけたい場合に、講義やビデオ等のコメント交換等によって行われる。同期型双方向はZoom等を用いて同じ時間を共有して学習する。非同期型一方向は講義録画の視聴、同期型一方向は、教員が一方向的に講義する形だが、これらを種にして双方向活動と組み合わせたハイブリッド型もあり、多くの工夫が行われている。

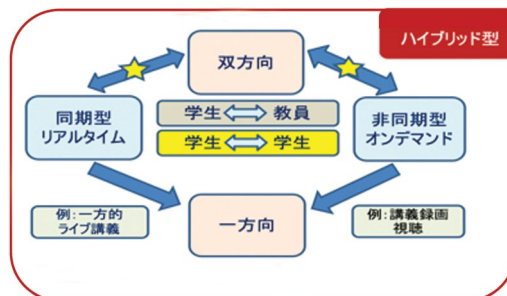


図2 オンライン国際交流の形

さらに、図3にオンライン国際交流教育の実渡航との比較を示す。オンラインによるメリットは、渡航にかかる物理的条件（渡航難易度：時間・距離・気象・渡航手段・費用・感染症を含む安全性等）の制約を受けないことから、平時でも、また対面困難な時や国・地域でも、安定的なオンライン接続が整えば、渡航による国際交流教育に比べて多くの人数、多くの国・地域からの参加が可能なことである。一方、デメリットは、五感で体験するインパクトが乏しいこと、個人としてマイノリティになる貴重な生活体験ができないこと、現地滞在で遭遇する偶然を含む広い出会い等がないこと等と考えられる。

オンライン国際交流教育は、多くの場合、コロナ禍以前は事前事後学習として実渡航の補完、コロナ禍以降は代替として採用されているが、上述のメリットは大変大きい。また、今後加速的な技術進歩によってデメリット

⁸ 図1. の不特定多数の受講生を対象とするMOOCsでも、同期・非同期型によらず双方向であれば、国際交流教育の範疇とする。

デメリットが減じていくと予測される。例えば、五感のうち視覚、聴覚に加えて触覚、臭覚等を感じる技術や3次元ホログラムはすでに存在しており、これらによって学生の協働学習の現場感覚を高める可能性があるなど、教育的展開に限りはない。

しかしながら、オンライン国際交流教育は、進化しても実渡航による国際交流教育と同一にはならず、それぞれ異なる特性を持ち続けると考えるのが妥当であろう。オンライン国際交流教育をその特性を活かす独立した新手法として捉え、実渡航による国際交流教育の特性と比較し、実渡航再開後は、両者を最適に組合わせてグローバルコンピテンス育成に活用することに高い価値があると考えます。教員には、その時代のオンラインによる技術力で可能・不可能なことを適切に見極めて柔軟に力を入れる力、技術力とファシリテータとしての能力、反転学習をデザインして行う力、実渡航とオンラインによる教育を組合わせた教育カリキュラムの編成力等が必要となり、新たな教育に挑むという意識が必要となる。

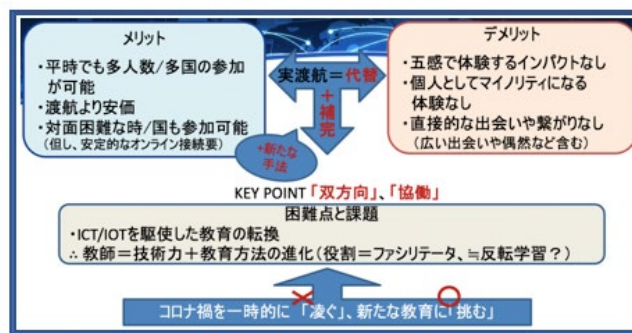


図3 オンライン国際交流教育の実渡航との比較

3. ブーラーパー大学日本語専攻学生と鹿児島大学生とのCOILの取組み (2020年度)⁹

ここで、オンライン国際交流教育の1種であるCOIL (図1) の具体例について紹介する。COILとは「オンラインコミュニケーションを用いて2カ国以上の国の間で教育と学習の両方を実現する革新的な教育方法」¹⁰である。筆者は、2020年度に鹿児島大学の海外連携校であるブーラーパー大学人文・社会科学部東洋言語学科ナンチャヤー・マハカン助教授が担当した日本社会や文化を学ぶ科目「日本文化」(日本語専攻3年生対象、履修者46名)と、自担当の共通教育教養活用科目「留学生のための異文化理解」(履修者37名)でCOILを実施した。

このCOIL授業の目的は、両大学の科目の目的(ブーラーパー大学:日本文化の深い理解、日本語能力の向上。鹿児島大学:文化とは何か、文化の相対性、多様な価値観の存在、異文化適応のモデル等について自らの経験を分かち合いながら学ぶ)に照らして、以下の4つとした。

- 1) 同世代の異国の学生と接し「個人」として認識することを体感し、無意識のステレオタイプと文化の多層性を理解する。
- 2) 相互理解とコミュニケーションへの積極性

⁹ この取組の説明は(畠田谷, 2022)の抜粋・要約である。授業評価等の詳細は、同論文を参照されたい。

¹⁰ 関西大学の定義による。

<https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/COIL/>

3) 対話者の母語以外でのコミュニケーションに対する配慮（鹿児島大学）、日本語の運用機会と運用経験による能力向上（ブーラパー大学）

4) 互いの国、地域、大学等に関する知識を深め、興味を育む。

使用言語は、目的3)を意図して日本語とした。授業内容は、まず両者の共通点と相違点、また同じ国の文化圏における個人間の差異、及び国や文化圏を超えた共通点の発見を意図して「両国/両国人のイメージ」について準備させ、対話させた（目的1)）。また、事前課題で相手に聞きたい質問を交換して説明を準備させ、学生が関心のあるテーマを通して自由活発に対話する機会を設けた（目的2), 4)）。さらに、相互に非言語コミュニケーションについて具体例を紹介させ、コミュニケーション能力の向上を図った（目的 2), 3), 4)）。

互いの学期の重複期間の都合上、3回の授業（各90分）しか同期型で繋げないため、事前に双方の学生数が均等になる数（各グループ6~7名）で13のグループ分けを行い、3回を通してグループメンバーを固定し、毎回30-45分をブレイクアウトルームの話合いに当ててできるだけ顔の見える関係性を作ることに努めた。併せて、ブレイクアウトルームの対話が円滑に進むよう、授業前に準備課題を出して教員に提出させ、授業後には両大学の学生が課外で交換する課題を課し、SNSを活用した交流を推奨した。「同年代の外国人と直接「個人」として接する体験」の時間をできるだけ多く設けようと企図したこれらの活動から、3週間という短い期間でもやり取りが生まれ、グループ内で課外の学生交流が多く見られた。課外時間に個人の接触を多く生むためにどのような課題を与えるか、課題の実施をどのようにモニターするかは、困難であるが、COIL成功のための重要な要素だと思われる。

これらの活動では、日本語専攻のブーラパー大生にも、様々な学部にあたる鹿児島大生にも、大きな利点が見られた。それは、ブーラパー大生の専門・興味が日本語と日本であることによると考えられる。一般的に、共通の関心が対話への興味や深さの鍵になる。同じ専門に属する学生の場合その専門内容となろうが、今回はブーラパー大生の学習対象が日本（語）であるため、彼らにとっては日本人学生と接するCOILそのものが意味ある機会となった。また、鹿児島大生にとっても、日本人としての自らの存在が相手の興味の対象であり、日本（語）を学ぶ海外学生の存在を知り初めて接触することで、その熱意や日本観、タイ王国に関する知識の獲得等、ブーラパー大生から大きな学びが見られた。鹿児島大生の授業評価では、殆どが「有意義、貴重な経験」とコメントし、オンラインでも国際交流教育の成果を十分得たことが確認できた。

4. 今後の展望：オンラインを含めた国際交流教育の今後の可能性とSDGsに貢献する意義

今回、ブーラパー大生とのCOILの具体例から、日本に興味を持つ海外学生が日本について学ぶ機会は、鹿児島大生には大きな刺激で、協働学習が契機となってその国や文化に興味を湧き、理解と個人的絆が深まること、また、ブーラパー大生にとっても学習対象である日本語・日本人との協働学習は意義深く、双方の学びが確実に起こることがわかった。海外の「日本語・日本学専攻学生とその教員」は、学習対象としての日本にとって重要な存在であり、日本国内の日本人学生（国内大学に在籍する外国人留学生含む）、海外で学ぶ日本語・日本学専攻学生双方にとって、大きな学習効果を生む大変貴重な関係であると言える。

そこで、海外の日本語・日本学専攻学生とのCOILの今後の可能性として、日本は扇の要となり、例えばタイ王国と日本という2国間から、他国の日本語・日本学を学ぶ学生へと多国間に広げることが意義深いと考える。多国の学生との協働プロジェクトやディスカッション、インターンシップ等における課題発見・解決の取組は、

グローバルコンピテンスを養う協働体験を生み、多国の学生間でのフィードバックは、全参加国の学生に新たな視点をもたらす。

日本は、日本（語）を鍵にして、海外の日本語・日本学教員と協力して「日本語・日本学専攻学生」を多国間/世界にネットワークとして繋ぎ、日本人学生（上述留学生含む）を混ぜてオンライン国際交流教育と実渡航による国際交流教育と組合せ、ともに学ぶ大きな機会を創ることが可能であり、意義深い。このように、日本語・日本学の教育を通して、教員と学生の顔の見える人的ネットワークを世界に広げれば、その人的ネットワークは、人文・社会・自然科学分野全てにわたる国際教育のネットワークにも波及的に貢献する可能性がある（SDGs 17グローバルパートナーシップの活性化）。また、人的ネットワークの他分野への横展開は、地球的課題解決の学際的な方向性にも合致する。さらに、地球市民Global Citizenとしての意識を醸成する質の高い教育（SDGs 4）に活用し、貢献できることは言うまでもない。この人的ネットワークの教育への意識的、積極的な有効展開が、大学における国際教育のこれからの可能性と意義であり、持続可能な開発に向けた地球的課題の解決に繋がるものとする。

บทความรับเชิญ

อนาคตของการจัดการศึกษานานาชาติในระดับอุดมศึกษาที่มุ่งสู่การพัฒนาอย่างยั่งยืน: การสร้างเครือข่ายการเรียนรู้ร่วมกับนักศึกษาวิชาญุ่บัณฑิตศึกษาทั่วโลก

1. บทนำ

ปัจจุบันขณะที่ผู้คนทั่วโลกกำลังหวั่นกับการแพร่ระบาดของไวรัสโคโรนา เรายังต้องเผชิญกับภาวะวิกฤตของ “ขีดจำกัดความปลอดภัยของโลก” (Planetary Boundaries) ซึ่งดร.โจฮัน ร็อกสตรอม (Johan Rockström) นักวิทยาศาสตร์สิ่งแวดล้อมได้เสนอแนวคิดนี้เมื่อปี 2009 โดยอ้างอิงข้อมูลพื้นฐานทางวิทยาศาสตร์ว่าเป็น “ขีดจำกัดของโลกที่จะรองรับได้ 9 ประการ ซึ่งจะต้องรักษาไว้เพื่อให้มนุษย์สามารถดำเนินชีวิตได้อย่างปลอดภัย” และส่งผลให้เกิดการพัฒนาอย่างยั่งยืน (ต่อไปขอเรียกว่า SDGs) ซึ่งปัจจุบันเชื่อว่า มี 2 ประการที่ค่าทะลุขีดจำกัดแล้ว ได้แก่ (1) การเปลี่ยนแปลงของสภาพอากาศ และ (2) การสูญเสียความหลากหลายทางชีวภาพ (Rockström, et al. 2009)

การแก้ปัญหของโลกที่ซับซ้อนและเข้าขั้นวิกฤตนี้ จำเป็นต้องอาศัยความร่วมมือจากนานาชาติ ซึ่งการจะทำให้สำเร็จได้ต้องเริ่มต้นที่ “การศึกษา” ซึ่งเป็นส่วนสำคัญที่จะช่วยให้มีความรู้ความเข้าใจ มีมุมมองเชิงวิทยาศาสตร์ มีสำนึกของการเป็นพลเมืองโลก (Global Citizen) โดยคำนึงถึงคนรุ่นใหม่¹ และเสริมสร้างสมรรถนะการอยู่ร่วมในสังคมโลก (Global Competence) ในปี 2018 OECD ได้ให้นิยามคำ Global Competence² ไว้ และบรรจุเป็นหัวข้อประเมินหนึ่งใน PISA หรือ โปรแกรมประเมินสมรรถนะนักเรียนมาตรฐานสากล (Programme for International Student Assessment, 2018) ในระดับอุดมศึกษาที่ควรเสริมสร้างและพัฒนาสมรรถนะดังกล่าวให้ดียิ่งขึ้น ผ่านการจัดการศึกษานานาชาติ³ ในหลากหลายสาขาวิชา ด้วยความที่ตระหนักถึงความสำคัญดังกล่าว บทความนี้จึงมีวัตถุประสงค์ที่จะนำเสนอภาพรวมและอภิปรายเกี่ยวกับการจัดการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติ⁴ โดยเฉพาะการจัดการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์⁵ ในช่วงการแพร่ระบาดของไวรัสโคโรนา เพื่อที่จะเสริมสร้างสมรรถนะดังกล่าวให้มีประสิทธิภาพยิ่งขึ้น และกล่าวถึงการเรียนร่วมกันผ่านระบบออนไลน์ (Collaborative Online International Learning ต่อไปจะเรียกว่า COIL) ระหว่างนักศึกษาระดับปริญญาเอกภาษาญี่ปุ่น มหาวิทยาลัยบูรพา กับนักศึกษามหาวิทยาลัยคาโงชิมะ โดย

¹ ตัวอย่างหนึ่งคือ Future Design (西# 2015,2018,2021 และเอกสารอ้างอิงหมายเลข 5) ซึ่งเป็นวิธีการออกแบบมาตรการที่จำเป็นในปัจจุบัน จากมุมมองของการวาดภาพอนาคต โดยตระหนักถึงความเหลื่อมล้ำในคนรุ่นถัดไป สูโลกที่สามารถพัฒนาอย่างยั่งยืน

² คำจำกัดความโดย PISA “Global Competence is a multidimensional capacity that encompasses the ability to examine global and intercultural issues, understand and appreciate different perspectives and viewpoints, interact successfully and respectfully with others, and take action for collective well-being and sustainable development”

³ ในบทความนี้หมายถึง “การศึกษาที่เสริมสร้างสมรรถนะในการอยู่ในสังคมโลกในความหมายกว้าง ไม่ว่าจะมิหรือมีการแลกเปลี่ยนข้ามวัฒนธรรมระหว่างนักศึกษา” กล่าวคือ หมายถึง การศึกษาที่มุ่งเสริมสร้างสมรรถนะดังกล่าวจากมุมมองเชิงนานาชาติ ซึ่งนอกเหนือจาก นานาชาติศึกษา ยังรวมไปถึงสาขาอื่นเช่น มนุษยศาสตร์ สังคมศาสตร์ วิทยาศาสตร์

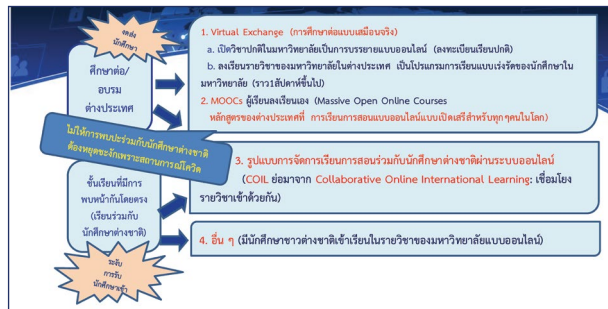
⁴ ในบทความนี้หมายถึง “การจัดการศึกษาที่ผู้เรียนต่างวัฒนธรรมได้เรียนรู้จากการแลกเปลี่ยนสองทาง ผ่านสถาบันการศึกษาภายในประเทศ หรือต่างประเทศที่ตนเองสังกัด”

⁵ หมายถึง “การจัดการศึกษาที่ผู้เรียนต่างวัฒนธรรมได้เรียนรู้จากการแลกเปลี่ยนสองทางในแบบออนไลน์ ผ่านสถาบันการศึกษาภายในประเทศ หรือต่างประเทศที่ตนเองสังกัด” (歌田谷, 2022)

ในบทความนี้จะกล่าวถึงความเป็นไปได้ในการจัดการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์ในอนาคตระหว่างนักศึกษาที่ศึกษาวิชาภาษาญี่ปุ่นหรือญี่ปุ่นศึกษาในต่างประเทศ ร่วมกับนักศึกษานิวมหาวิทยาลัยของญี่ปุ่น และความสำคัญที่มีต่อการส่งเสริมหลักคิดเกี่ยวกับการพัฒนาอย่างยั่งยืน

2. การจัดการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์

การจัดการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติไม่สามารถดำเนินการได้ตั้งแต่ต้นปี 2020 เนื่องจากการแพร่ระบาดของไวรัสโคโรนา อย่างไรก็ตามคณาจารย์ที่อยู่ในแต่ละประเทศต่างมีความเห็นที่ตรงกันคือ ไม่อยากให้ความสัมพันธ์ระหว่างนักศึกษาต่างชาติและโอกาสของการทำความรู้จักกันต้องหยุดชะงักลงแม้จะอยู่ท่ามกลางสถานการณ์แพร่ระบาดของโคโรนา ด้วยเหตุนี้ จึงได้มีการจัด “การสอนออนไลน์เพื่อทดแทน” อย่างกว้างขวางดังที่แสดงในแผนภาพที่ 1⁶ การที่ต้องระงับการส่งนักศึกษาไปศึกษาต่อในต่างประเทศ ทำให้หลายประเทศได้พัฒนาโปรแกรม Virtual Exchange หรือ “การศึกษาต่อแบบเสมือนจริง” ซึ่งก็พบว่ามึนักศึกษาที่ตัดสินใจสมัครเรียนคอร์สออนไลน์แบบเปิดเสรีขนาดใหญ่ในต่างประเทศ⁷ (ต่อไปขอเรียกว่า MOOCs) มากขึ้นอันเนื่องมาจากกำหนดการเดินทางไปศึกษาต่อต้องเลื่อนออกไปไม่มีกำหนด นอกจากนี้ การงัดรับนักศึกษาต่างชาติทำให้ไม่สามารถจัดการเรียนการสอนนานาชาติร่วมกันแบบปกติที่มีการเผชิญหน้าได้ ดังนั้นจึงพบว่ามีการจัดโครงการ COIL ที่เชื่อมโยงชั้นเรียนของแต่ละที่เข้าด้วยกันโดยร่วมกับอาจารย์ในต่างประเทศ หรือการให้นักศึกษาชาวต่างชาติที่อยู่ภายนอกประเทศญี่ปุ่นสามารถเข้าเรียนร่วมในคอร์สที่สอนแบบออนไลน์ตามความสมัครใจ สำหรับโครงการ COIL นอกจากจะเข้ามาทดแทนการจัดโครงการแลกเปลี่ยนแบบปกติแล้ว ยังทดแทนการส่งนักศึกษาไปศึกษาต่ออย่างต่างประเทศด้วยเช่นกัน



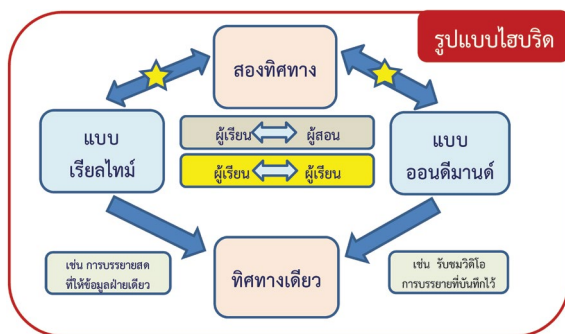
ภาพที่ 1 การจัดการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์ ทดแทนการเดินทางไปยังพื้นที่จริง

ต่อไปจะขอกล่าวถึงภาพรวมของรูปแบบการจัดการเรียนการสอนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์ จะเห็นว่ามึทั้งแบบเรียลไทม์ซึ่งเป็นการสื่อสารแบบสองทาง และแบบออนดีมานด์ซึ่งเป็นการสื่อสารแบบทางเดียว ทำนองเดียวกับการจัดการเรียนการสอนแบบออนไลน์ทั่วไป การจัดการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติ นอกจากจะทำให้มีการสื่อสารระหว่างนักศึกษากับอาจารย์แล้ว ยังเป็น “การแลกเปลี่ยนแบบสองทาง” และเป็นโอกาสที่ให้นักศึกษานานาชาติ ได้ “ร่วมมือกัน” ทั้งในกรณีที่เป็นชั้นเรียนแบบเรียลไทม์ และแบบออนดีมานด์

⁶ ในภาพที่ 1 หกมหาวิทยาลัยนอกประเทศญี่ปุ่นเช่นประเทศไทยเป็นจุดเริ่มต้น (ส่งผู้เรียนออกไป [派遣] 「海外大学」 ที่จัด 「Virtual Exchange (仮想留学)」 หมายถึงมหาวิทยาลัยในประเทศญี่ปุ่น (รับผู้เรียนเข้ามา 「受け入れ」)

⁷ ในช่วงต้นปี 2022 ประเทศญี่ปุ่นได้เริ่มโครงการนำร่องของ Japan Virtual Campus ซึ่งเป็นแพลตฟอร์มการศึกษาออนไลน์ ระดับนานาชาติสำหรับประเทศต่าง ๆ ทั่วโลก โดยมีสถาบันอุดมศึกษาในประเทศญี่ปุ่นเข้าร่วมจำนวนมาก นอกจากนี้มหาวิทยาลัยในต่างประเทศก็เข้าร่วมได้เช่นกัน <https://www.jv-campus.org/>

ซึ่งถือเป็นกุญแจสำคัญในการเสริมสร้างสมรรถนะในการอยู่ในสังคมโลกดังปรากฏในภาพที่ 2^๘ การจัดชั้นเรียนแบบออนไลน์ที่มีการสื่อสารสองทางเหมาะสำหรับกรณีที่มีความแตกต่างด้านเวลามาก หรือกรณีที่ต้องการใช้เวลาเพื่อจัดอุปสรรคด้านภาษาในการทำกิจกรรม โดยแลกเปลี่ยนความคิดเห็นเกี่ยวกับการบรรยาย หรือคลิปลิวดิโอ เป็นต้น การจัดชั้นเรียนแบบเรียลไทม์ที่มีการสื่อสารสองทาง คือการเรียนรู้แบบประสานเวลาผ่านโปรแกรม Zoom เป็นต้น การจัดชั้นเรียนแบบออนไลน์ที่มีการสื่อสารทางเดียว เช่น การดูคลิปลิวดิโอการบรรยาย การจัดชั้นเรียนแบบเรียลไทม์ที่มีการสื่อสารทางเดียว เช่น การที่ผู้สอนบรรยายเพียงอย่างเดียว อย่างไรก็ตาม สามารถใช้ร่วมกับกิจกรรมอื่นที่มีการสื่อสารสองทางเพื่อจัดการเรียนการสอนแบบผสมผสาน ซึ่งพบว่ามีมีการประยุกต์ใช้ได้หลากหลายรูปแบบ



ภาพที่ 2 รูปแบบการแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์

นอกจากนี้ ภาพที่ 3 แสดงการเปรียบเทียบระหว่างการจัดการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์ กับแบบเดินทางไปศึกษาในพื้นที่จริง

หากเปรียบเทียบกับการเดินทางไปเรียนในพื้นที่จริง ข้อดีของการเรียนแบบออนไลน์คือ หากสัญญาณอินเทอร์เน็ตมีความเสถียร สามารถรองรับผู้เรียนจำนวนมากเรียนได้ในคราวเดียวจากทั้งในประเทศและต่างประเทศ ทั้งในเวลาปกติ และในกรณีที่มีข้อจำกัดด้านเวลาหรือสถานที่ในการพบปะพูดคุย เนื่องจากไม่มีข้อจำกัดทางกายภาพ เช่นเดียวกับการเดินทางไปเรียนในพื้นที่จริง (ข้อจำกัดในการเดินทางไปพบกันในพื้นที่ ขึ้นอยู่กับ เวลา ระยะทาง สภาพอากาศ วิธีเดินทาง ค่าใช้จ่าย และความปลอดภัย ซึ่งหมายรวมถึง ความเสี่ยงที่จะติดเชื้อ) สำหรับข้อเสียของการเรียนแบบออนไลน์ คือ การขาดโอกาสที่จะได้สัมผัสกับประสบการณ์จริง ไม่ได้ใช้ชีวิตในฐานะนักเรียนต่างชาติ ซึ่งเป็นคนกลุ่มน้อยในสังคมนั้น ไม่มีโอกาสพบปะผู้คนในพื้นที่โดยตรง และผู้คนทั่วไปในสังคม

ก่อนที่จะมีการแพร่ระบาดของไวรัสโคโรนา มีการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์ แต่เป็นการเรียนก่อนหรือหลังเพื่อเสริมการศึกษาในพื้นที่จริง แต่เมื่อเกิดการแพร่ระบาดของไวรัสโคโรนา ได้มีการใช้รูปแบบการสอนออนไลน์มาทดแทนการศึกษาในพื้นที่จริงอย่างเต็มรูปแบบ ซึ่งจะเห็นได้ว่า มีข้อดีมากมายดังที่กล่าวไปแล้วข้างต้น และในอนาคตคาดว่า ด้วยความก้าวหน้าอย่างรวดเร็วของเทคโนโลยีจะช่วยจัดข้อเสียให้ลดน้อยลง เช่น มีการพัฒนาเทคโนโลยีที่ทำให้รู้สึกถึงผิวสัมผัส และการรับรู้กลิ่น ฯลฯ เพื่อให้เกิดประสบการณ์ผ่านประสาทสัมผัสทั้งห้า ที่นอกเหนือจากการมองเห็นและการได้ยิน เทคโนโลยีโฮโลแกรม 3 มิติ (3D Hologram) ก็จะช่วยให้ผู้เรียนรู้สึกเสมือนอยู่ในพื้นที่จริงมากขึ้น และเกิดวิวัฒนาการทางการศึกษาแบบไร้ขีดจำกัด

^๘ ในภาพที่ 2 MOOCs ซึ่งมีกลุ่มเป้าหมายเป็นผู้เรียนจำนวนมากที่ไม่เจาะจง หากเป็นการสื่อสารสองทางไม่ว่าจะแบบเรียลไทม์ หรือแบบออนดีมานด์ ก็ถือว่าเป็นการจัดการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติ

อย่างไรก็ตาม ถึงแม้จะมีการพัฒนารูปแบบการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์ก็ตาม แต่ก็ไม่อาจเทียบเท่ากับการศึกษาในพื้นที่จริง เราควรมองว่ารูปแบบการเรียนการสอนสองประเภทนี้มีลักษณะพิเศษที่แตกต่างกัน ควรศึกษาเปรียบเทียบลักษณะพิเศษของรูปแบบการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์ซึ่งเป็นแนวทางใหม่ เทียบการเรียนในพื้นที่ ผู้เขียนคิดว่าเมื่อมีการเปิดประเทศให้เดินทางไปมาได้อีกครั้ง จะมีประโยชน์อย่างยิ่งหากได้นำเอาข้อดีของทั้งสองแบบนี้มาใช้เสริมสร้างสมรรถนะการอยู่ร่วมกันในสังคมโลก ผู้สอนจึงต้องกล้าเผชิญหน้ากับแนวทางการศึกษาใหม่ ๆ ซึ่งต้องอาศัยทักษะการพินิจพิเคราะห์ว่าเทคโนโลยีออนไลน์ในแต่ละยุคนั้น ทำอะไรได้และทำอะไรไม่ได้บ้าง ต้องมีทักษะในการใช้เทคโนโลยีเหล่านั้น ต้องมีความสามารถในการทำหน้าที่เป็นผู้อำนวยการความสะดวกร มีความสามารถในการออกแบบการเรียนกลับด้าน มีทักษะในการปรับปรุงหลักสูตรโดยผสมผสานการเรียนในพื้นที่เข้ากับการเรียนแบบออนไลน์



ภาพที่ 3 เปรียบเทียบการสอนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์กับแบบเดินทางไปศึกษาในพื้นที่จริง

3. การทดลองจัด COIL ร่วมกันระหว่างนักศึกษาวิชาเอกภาษาญี่ปุ่นมหาวิทยาลัยบูรพา กับนักศึกษามหาวิทยาลัยคาโงชิมะ ประจำปี 2020⁹

ต่อไปจะขอแนะนำตัวอย่างการจัดโครงการ COIL ซึ่งถือว่าเป็นการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์¹⁰ ประเภทหนึ่ง COIL หมายถึง “การเรียนการสอนรูปแบบใหม่ที่จัดการศึกษาและการเรียนรู้ระหว่างประเทศต่าง ๆ มากกว่า 2 ประเทศขึ้นไปผ่านการสื่อสารออนไลน์” ผู้เขียนได้จัดโครงการ COIL ระหว่างนักศึกษาวิชาเอกภาษาญี่ปุ่นชั้นปีที่ 3 ภาควิชาภาษาตะวันออก คณะมนุษยศาสตร์และสังคมศาสตร์ มหาวิทยาลัยบูรพา ซึ่งเป็นมหาวิทยาลัยคู่สัญญาของมหาวิทยาลัยคาโงชิมะ ในรายวิชา “วัฒนธรรมญี่ปุ่น” ซึ่งต้องเรียนรู้เกี่ยวกับสังคมและวัฒนธรรมญี่ปุ่น มีผู้ลงทะเบียน 46 คน อาจารย์ผู้รับผิดชอบรายวิชาคือ ผศ.ดร.นันทชญา มหาขันธ์ กับนักศึกษามหาวิทยาลัยคาโงชิมะ ในรายวิชา “การสื่อสารข้ามวัฒนธรรมสำหรับนักศึกษาชาวต่างชาติ” ซึ่งอยู่หมวดวิชาศึกษาทั่วไปที่ผู้เขียนรับผิดชอบ มีผู้ลงทะเบียน 37 คน

การจัดโครงการ COIL ในครั้งนี้ เพื่อให้สอดคล้องกับวัตถุประสงค์ของรายวิชาของทั้งสองมหาวิทยาลัย (กรณีมหาวิทยาลัยบูรพา คือ เข้าใจวัฒนธรรมญี่ปุ่นอย่างลึกซึ้ง และ พัฒนาความสามารถด้านภาษาญี่ปุ่น กรณีมหาวิทยาลัยคาโงชิมะ คือ เรียนรู้ความหมายของวัฒนธรรม วัฒนธรรมสัมพันธ์ ค่านิยมที่หลากหลาย ศึกษาต้นแบบการปรับตัวข้ามวัฒนธรรมผ่านการแบ่งปันประสบการณ์) ได้กำหนดวัตถุประสงค์ไว้ 4 ประการดังนี้

⁹ เนื้อหาที่นำเสนอในที่นี้ เป็นส่วนหนึ่งของบทความ 藤田 裕, 2022 รายละเอียดเกี่ยวกับการประเมินโครงการและอื่น ๆ สามารถดูเพิ่มเติมได้ในบทความดังกล่าว

¹⁰ อ้างอิงคำจำกัดความจากมหาวิทยาลัยคันไซ <https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/Jp/COIL/>

- 1) เพื่อให้ผู้เข้าร่วมโครงการมีโอกาสสื่อสารกับนักศึกษาต่างชาติด้วยด้วยกัน ตระหนักในความแตกต่างของแต่ละบุคคล เข้าใจในความหลากหลายทางวัฒนธรรม และความเชื่อแบบเหมารวม (Stereotype) ที่เกิดขึ้นโดยไม่รู้ตัว
- 2) เพื่อกระตุ้นการสื่อสารและความเข้าใจซึ่งกันและกัน
- 3) เพื่อให้ผู้เรียน (มหาวิทยาลัยคาทอลิก) เรียนรู้การพิจารณาความเหมาะสมของภาษาญี่ปุ่นที่ใช้ในการสื่อสารกับชาวต่างชาติ และเพื่อพัฒนาทักษะภาษาญี่ปุ่นของผู้เรียน (มหาวิทยาลัยบูรพา) จากโอกาสและประสบการณ์การใช้จริง
- 4) เพื่อให้ผู้เรียนมีความรู้ และเกิดความสนใจเกี่ยวกับประเทศ ภูมิภาค และมหาวิทยาลัย ฯลฯ ของกันและกัน เพื่อให้บรรลุวัตถุประสงค์ข้อที่ 3 จึงกำหนดให้ผู้เข้าร่วมโครงการใช้ภาษาญี่ปุ่นในการสื่อสาร เนื้อหาการเรียนการสอนประกอบด้วย
 1. ให้ผู้เรียนเตรียมเนื้อหาในหัวข้อ “ภาพลักษณ์ของสองประเทศ และผู้คนในประเทศนั้น” แล้วสนทนาโต้ตอบกัน โดยมีเจตนาเพื่อให้ผู้เรียนได้ค้นพบจุดเหมือนและจุดต่างของทั้งสองประเทศ รวมทั้งตระหนักในความแตกต่างระหว่างบุคคลของคนในประเทศเดียวกัน และจุดร่วมที่ก้าวข้ามประเทศหรือความแตกต่างทางวัฒนธรรม (วัตถุประสงค์ข้อ 1)
 2. ให้โอกาสผู้เรียนได้พูดคุยโต้ตอบโดยอิสระในหัวข้อที่สนใจ โดยให้แลกเปลี่ยนคำถามในประเด็นที่กำหนดล่วงหน้า และเตรียมคำอธิบาย (วัตถุประสงค์ข้อ 2, 4)
 3. พัฒนาทักษะการสื่อสาร โดยให้แต่ละฝ่ายแนะนำตัวอย่างการสื่อสารที่ใช้อัจฉริยะภาษา (วัตถุประสงค์ข้อ 2, 3, 4)

โครงการนี้สามารถจัดในรูปแบบประสานเวลาได้ทั้งหมด 3 ครั้ง (ครั้งละ 90 นาที) ตามความสะดวกในช่วงที่ภาคเรียนตรงกัน จึงได้แบ่งกลุ่มผู้เรียนล่วงหน้า ออกเป็น 13 กลุ่ม โดยมีสมาชิกจากทั้งสองมหาวิทยาลัยเฉลี่ยเท่า ๆ กัน (กลุ่มละ 6-7 คน) สมาชิกจะอยู่ในกลุ่มเดิมตลอดการทำกิจกรรมทั้ง 3 ครั้ง แต่แต่ละครั้งสมาชิกในกลุ่มจะได้สนทนากันประมาณ 30-45 นาที โดยการแบ่งกลุ่มย่อยในโปรแกรมซูม และพยายามให้ทุกคนได้สร้างความสัมพันธ์ระหว่างกันและได้เห็นหน้าตาจริง นอกจากนี้เพื่อให้การสนทนาโต้ตอบในกิจกรรมกลุ่มย่อยเป็นไปด้วยความราบรื่น จึงได้ให้ผู้เรียนส่งการบ้านที่ต้องทำล่วงหน้าก่อนเข้าเรียนที่ผู้สอนและหลังเลิกเรียนก็ให้การบ้านใหม่ที่ผู้เรียนต้องสื่อสารแลกเปลี่ยนกันนอกชั้นเรียน โดยได้แนะนำให้ใช้ สื่อโซเชียลมีเดียให้เป็นประโยชน์ในการแลกเปลี่ยนข้อมูลซึ่งกันและกัน กิจกรรมนี้ให้เวลาค่อนข้างมากเพื่อให้ผู้เรียนได้ประสบการณ์ตรงในการสื่อสารกับนักศึกษาต่างชาติด้วยกัน ในฐานะบุคคลหนึ่ง แม้จะเป็นระยะสั้น ๆ เพียง 3 สัปดาห์ แต่ก็พบว่ามีการแลกเปลี่ยนระหว่างผู้เรียน โดยเฉพาะอย่างยิ่ง พบว่ามีการพูดคุยสื่อสารกันภายนอกชั้นเรียนระหว่างสมาชิกภายในกลุ่มเป็นจำนวนมาก ทั้งนี้การพิจารณาหัวข้อปัญหาที่เหมาะสมเพื่อกระตุ้นให้เกิดการสื่อสารนอกชั้นเรียน หรือการสังเกตการณ์การทำงานร่วมกันเพื่อแก้ปัญหาอาจเป็นเรื่องยาก แต่สิ่งเหล่านี้เป็นปัจจัยสำคัญที่จะช่วยให้การจัดโครงการ COIL ประสบผลสำเร็จ

กิจกรรมเหล่านี้เป็นประโยชน์อย่างมากกับทั้งนักศึกษาวิชาเอกภาษาญี่ปุ่นมหาวิทยาลัยบูรพา และนักศึกษาคณะต่าง ๆ ของมหาวิทยาลัยคาทอลิก ซึ่งนั่นเป็นเพราะนักศึกษามหาวิทยาลัยบูรพาเรียนวิชาเอก หรือมีความสนใจในภาษาญี่ปุ่น และประเทศญี่ปุ่น โดยทั่วไปแล้วความสนใจร่วมจะเป็นกุญแจนำไปสู่ความรู้สึกลึกซึ้งสนทนาโต้ตอบหรือทำให้สามารถสนทนาได้อย่างลึกซึ้ง ถ้าเป็นนักศึกษาที่เรียนวิชาเอกเดียวกัน ความสนใจร่วมก็คือเนื้อหาเฉพาะสาขานั้น กรณีของนักศึกษามหาวิทยาลัยบูรพา เนื่องจากเรียนภาษาญี่ปุ่นเป็นวิชาเอก การเข้าร่วมโครงการ COIL

ซึ่งมีโอกาสสัมผัสกับนักศึกษาชาวญี่ปุ่นจึงเป็นโอกาสอันมีค่าสำหรับพวกเขา สำหรับนักศึกษามหาวิทยาลัยคาทอลิกก็เช่นเดียวกัน พวกเขาได้รู้ว่าการที่ตัวเองเป็นคนญี่ปุ่นเป็นเป้าหมายความสนใจ ได้รู้ว่ามีนักศึกษาต่างชาติที่ศึกษาเกี่ยวกับ (ภาษา) ญี่ปุ่น และได้พูดคุยด้วยเป็นครั้งแรก ได้สัมผัสกับความตั้งใจจริงและรับรู้มุมมองของนักศึกษาต่างชาติที่มีต่อญี่ปุ่น ได้ความรู้เกี่ยวกับประเทศไทย ซึ่งถือว่าได้เรียนรู้มากมายจากนักศึกษามหาวิทยาลัยบูรพา นักศึกษามหาวิทยาลัยคาทอลิกส่วนใหญ่ประเมินการเข้าร่วมโครงการว่า “เป็นประสบการณ์ที่มีคุณค่า และมีประโยชน์” จึงกล่าวได้ว่ารูปแบบการจัดการเรียนการสอนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติประสบผลสำเร็จด้วยดีแม้ในรูปแบบออนไลน์

4. ความคาดหวังในอนาคต: ความเป็นไปได้ของการจัดการเรียนการสอนและแลกเปลี่ยนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์ และประโยชน์ที่มีต่อการพัฒนาอย่างยั่งยืน

การจัดโครงการ COIL ร่วมกับมหาวิทยาลัยบูรพาในครั้งนี้ พบว่า การที่นักศึกษาต่างชาติมีความสนใจ และเรียนรู้เกี่ยวกับประเทศญี่ปุ่น เป็นแรงกระตุ้นที่ดีสำหรับนักศึกษามหาวิทยาลัยคาทอลิก ทำให้นักศึกษามีความสนใจในวัฒนธรรมและประเทศนั้น ๆ เกิดความเข้าใจและมีสายสัมพันธ์ส่วนตัวที่ลึกซึ้ง สำหรับนักศึกษามหาวิทยาลัยบูรพาก็เช่นกัน การได้เรียนรู้แบบร่วมมือกับชาวญี่ปุ่นมีความหมายที่ลึกซึ้ง และยังพบว่าทั้งสองฝ่ายเกิดการเรียนรู้ขึ้นโดยแท้จริง “นักศึกษาวิชาเอกภาษาญี่ปุ่น และคณาจารย์ผู้สอน” ในต่างประเทศ เปรียบเสมือนสมบัติอันล้ำค่าสำหรับประเทศญี่ปุ่น และกล่าวได้ว่าเป็นผู้ที่มีความสำคัญอย่างมากที่จะช่วยสร้างประสิทธิผลการเรียนรู้สำหรับทั้งนักศึกษาชาวญี่ปุ่นในประเทศญี่ปุ่น (รวมถึงนักศึกษาชาวต่างชาติในประเทศญี่ปุ่น) และนักศึกษาวิชาเอกภาษาญี่ปุ่นและญี่ปุ่นศึกษาในต่างประเทศ

ต่อไปจะขอกล่าวถึงความเป็นไปได้ของการจัด COIL ร่วมกับนักศึกษาวิชาเอกภาษาญี่ปุ่น และญี่ปุ่นศึกษาในต่างประเทศ ประเทศญี่ปุ่นจะทำหน้าที่เป็นแกนหลัก โดยขยายจากการจัดระหว่าง 2 ประเทศ คือไทยและญี่ปุ่น ไปสู่ประเทศอื่น ๆ อีกหลายประเทศ ซึ่งจะเป็โครงการที่มีประโยชน์มาก การจัดการเรียนรู้แบบร่วมมือโดยการทำโครงการ การอภิปราย หรือการฝึกงานร่วมกับนักศึกษานานาชาติ ผู้เรียนได้รับประสบการณ์ ค้นพบปัญหา และลงมือแก้ไข ให้ความร่วมมือในอันที่จะเสริมสร้างสมรรถนะในการอยู่ร่วมกันในสังคมโลก นอกจากนี้การที่ผู้เรียนหลากหลายประเทศได้แสดงความคิดเห็น ยังช่วยให้เกิดมุมมองใหม่ ๆ แก่ทุกคนที่เข้าร่วมโครงการด้วย

ประเทศญี่ปุ่นควรใช้ (ภาษา) ญี่ปุ่นเป็นกุญแจในการให้ความร่วมมือกับคณาจารย์ที่สอนภาษาญี่ปุ่น/ญี่ปุ่นศึกษา เพื่อสร้างเครือข่ายเชื่อมโยงกับ “นักศึกษาวิชาเอกภาษาญี่ปุ่นและญี่ปุ่นศึกษา” ในประเทศต่าง ๆ ทั่วโลก โดยสามารถสร้างโอกาสอันยิ่งใหญ่ในการเรียนรู้ร่วมกันกับนักศึกษาชาวญี่ปุ่น (รวมถึงนักศึกษาชาวต่างชาติในประเทศญี่ปุ่น) ด้วยการผสมผสานการจัดการสอนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติผ่านระบบออนไลน์ กับการศึกษาในพื้นที่จริงเข้าด้วยกัน ซึ่งเป็นเรื่องที่มีความหมายมาก หากขยายเครือข่ายระหว่างบุคคลที่สามารถเห็นหน้าตากันระหว่างผู้สอนและผู้เรียนผ่านการเรียนการสอนภาษาญี่ปุ่น และญี่ปุ่นศึกษาไปทั่วโลกเช่นนี้ ก็มีความเป็นไปได้ที่เครือข่ายระหว่างบุคคลนั้น จะเป็นประโยชน์ต่อเครือข่ายการศึกษานานาชาติในสาขาอื่น ๆ อันได้แก่ มนุษยศาสตร์ สังคมศาสตร์ และวิทยาศาสตร์ด้วยเช่นกัน (SDGs ข้อที่ 17 การเสริมสร้างความเข้มแข็งให้แก่มุมมองความร่วมมือระดับโลก) การขยายไปสู่เครือข่ายระหว่างบุคคลในสาขาอื่นตามแนวคิดข้างเช่นนี้ ยังพ้องกับทิศทางการศึกษาเชิงสหวิทยาการที่มุ่งสู่การแก้ปัญหาของโลก และยังช่วยสร้างการศึกษาที่มีคุณภาพ (SDGs ข้อที่ 4) ซึ่งบ่มเพาะการตระหนักในความเป็พลเมืองโลก (Global Citizen) ผู้เขียนคิดว่า ความตั้งใจ และความพยายามในการขยายการศึกษาที่สร้างเครือข่ายระหว่างบุคคล มีความสำคัญและสามารถต่อยอดให้เกิดการจัดการเรียนการสอนร่วมกับนักศึกษาต่างชาติในระดับอุดมศึกษาได้ อันจะนำไปสู่การแก้ปัญหาในระดับโลกอันเป็นเป้าหมายของการพัฒนาอย่างยั่งยืน

参考文献 (References)

- Rockström, J., Steffen, W., Noone, K. et al.(2009). A safe operating space for humanity, Nature 461 472–475. Retrieved from <https://doi.org/10.1038/461472a>
- PISA, OECD’s Programme for International Student Assessment, Retrieved from <https://www.oecd.org/pisa/innovation/global-competence/ee/>
- 西條辰義編 (2015). 『フューチャーデザイン 七世代先を見据えた社会』 勁草書房.
- 西條辰義他 (2018). 『フューチャー・デザイン特集』 学術の動向2018年6月号、公益財団法人日本学術協力財団. Retrieved from <http://jssf86.org/doukou267.html> 同2021年2月号 <http://jssf86.org/doukou299.html>
- ローマン・クルツナリック. 良いご先祖様になるために. Retrieved from https://www.ted.com/talks/roman_krznicaric_how_to_be_a_good_ancestor?language=ja
- 畝田谷桂子 (2022). オンライン国際交流教育によるグローバルコンピテンス育成の一考察-タイ王国プーラーパー大学とのオンライン国際協働学習の試み-. 鹿児島大学総合教育機構紀要 第5号2021、鹿児島大学.

Affiliation: Global Initiative Center, Kagoshima University

Corresponding email: k5126061@kadai.jp

Received: 2022/3/8

Revised: 2022/4/21

Accepted: 2022/5/5